

ミヤイリガイの繁殖条件に関する研究

二 瓶 直 子

本学大学院修士課程を修了後、東大医科学研究所寄生虫研究部に在籍し、医学地理学的立場から風土病や汚水の生物学的浄化等に関する研究に従事して、早や10年が過ぎた。昨年東大医学部にて、上記の題目で、医学博士の学位を受けた。学位受与については~~秘~~ではないが、さして広言する必要もなく、このような場で筆を執ることは本意ではない。

男女を問わず学問に指向する者が、学問を続け、その研究活動のある時期に学位が授与されることは、名誉云々ではなく、ある意味で当然のことかと考える。むしろ学位を取得したいが為に、好きでもない研究活動に無理に従事することが問題である。

幸か不幸か、お金に全く縁のない医学その他の貧乏学者の群の中に育った私にとって、色々な挫折や迷いはあったが、医的事象の地理学的研究をテーマに学問を志すことは、最適な道であると思われる。女性が研究活動を継続する上で、特にテーマの選択が重要であろう。

女であるがため、否私個人の立場から、研究活動が極端に制約されていることは事実である。2回の出産、約半年の滞米、5回の引越等で貴重な研究時間が妨げられた。日常の家事の主人との分担は、武家出身の祖母・父の教育を受けた私にとって、心情的に許さない。現実には毎日朝7時から夜8時あるいは夜中まで、生死をさ迷う病人相手に激務に従事する主人にそれが出来よう筈がない。

子供にとっては乳幼児期こそ母親が必要と考え、子供を保育園に入れることには抵抗があった。出産・育児に最も手のかかる時期は、研究を志す母親にとって最も勉強を要する重要な時間でもある。この時期を如何に過すかは、日本のみでなく他国の女性研究者の共通の問題であると聞く。仕事の時間を捻出する最良の方法は、幸田露伴の言う如く、家事に熟練することであった。かくてせっせ、せっせと掃除、洗濯、料理、育児に従事する破目となった。

しかしある時は自分の能力に見切をつけ、ある時は持ち時間の余りの短かさに焦り、そして常に寝不足と戦いながら、今なお試行錯誤の連続である。

こんな生活形態でも、どうにかこうにかプロとして研究が続けられた理由の3分の1は、本学及び医科研の諸先生方の指導、理解、激励であり、残りは主人の理解と母の協力が夫々3分の1であった。この3者の間隙を充填し原動力となったもののみが、私自身に起因すると思う。

現内閣の厚生大臣の父で、私の伯父にあたる橋本龍五は、死の病床にあってなおかつ本を読み勉強に精励していた。その姿が常に私の脳裡にあった。また次兄の死も、血液透析の患者さん達の姿も、どんな逆境にあっても前進して生きる道を教えてくれた。しかし何と言っても私自身が研究活動が好きで人一倍丈夫であったことがその原動力となった、と人は言う。

女性が研究に従事する上で、私の置かれた立場や方法は余りにも多くの障害があり、範となるものではない。より恵まれた至適環境が現在の日本にもあろうし、無ければならないと思う。私には日進月歩の科学の世界にあって、社会運動として女性の地位の向上を叫ぶ程の時間的、精神的余裕はなか

った。身近にいる真に学ぼうとする女性研究者の立場を互いに守り、励ましあうだけであった。有能でない未熟な私にとっては学位のことなど念頭になく、今後も諸先生方の指導を賜わりながら、遭遇する障害を1つ1つ乗り越えて勉強を続けていきたいと思っている。(15回生)

筑波研究学園都市に暮して

牧 島 悠美子

茨城県新治郡桜村を中心に周辺五町村にまたがり、山手線の内側とはほぼ同じ広さをもつ研究学園都市には、筑波大学を含め国立の機関が43ある。南北に長く東西を桑畑や野菜畑に虫食いされたこの地域の北部に大学があり、中央近くに各研究機関の交流の場として同時通訳などの設備をもつ研究交流センターがある。公園、遊歩道は良く整備され、特に道路は他地域に比べると雲泥の差であるが、幹線道路がこの地域の通過交通路にもなっているため、すでに騒音公害がおこっている。

夫の勤務先の移転に伴ない転居して一年余になるが、周辺の松林は切り倒され、人も増えた。ぬかるみや雑木林を抜けての買物も敷石の遊歩道となった。筑波の見本であるソ連のアカデムゴロゾフは、寒帯のため緑の回復に時間がかかるので、自然を残すことに非常に力を注いだというが、ここではブルドーザーを入れても半年位で緑が回復するため、既存の自然への思いやりが少ないように思う。雑木林の少動物達も少なくなった。

研究学園都市には人口が思うように増えぬという悩みがある。教育の問題ともからんで中・高校生位の子供のいる家庭は、単身赴任や、東京近辺からの通勤組が多い。昨春開校予定であった地区第二の中学校は生徒不足のため、校舎はすでに完成しているのに開校を一年遅らせた位である。民間企業が予想に反して移転してこない。これは公務員の「兼業規定」に阻まれて、企業側にも研究所員や大学教官達にもメリットが少ないこと、かえって東京にいた方がアルバイトをしてもバレーに済むということもあるという。

今春地域内に、教育大学のOB会による全寮制の男子中・高校の茗溪学園、県立高校が開校の予定であるが、昨春は最も近くの土浦一高に学園都市から大挙入学したため、地元の子供達が追い出され、快く思っていない人も多いようである。地元の人々と、新しく来た人々との感情的対立は様々なところであるもので、公民館のピアノ一つにしても学園都市内の新しい公民館にはあるのに、古くからの公民館にはオルガンさえ無いという不満がある。私から見ても周辺地区に比べて新しい町には余りに多くお金を注ぎ過ぎているような気がする。道路を見てもそれが歴然としている。遊歩道には石をはめ、木を植え、芝生をはり、所々にベンチを置き(なぜかクズカゴは無い所が多いが)、疾走する車を避けながら小さくなって歩かねばならぬ周辺の道路とは余りに対照的である。

公民館の隣には児童館がある。学童保育所であると同時に幼児の雨天体操場及び図書館である。蔵書も増え、利用者もうなぎ登りである。粘土やクレヨン、積木などもそろい、幼稚園や保育所のような感じである。その隣は保育園で0才児から預かってくれる。保母さんの数も充分で、子供達は楽しそうである。